



洗心

村山市立袖崎小学校
学校だより
No.9

令和7年8月28日発行

物語を読む意味



前期後半が始まりました。大きなけがや事故なく夏休みを過ごせたことは、保護者の皆様、地域の皆様のおかげと心より感謝申し上げます。今回は、(前号でもお伝えしましたが)子どもたちに話をした「物語を読む意味」を一部紹介いたします。



＊ ＊ 「挑戦し、やり抜く」力をつけるためにすぐにできる方法の一つは本を読むことです。なぜなら、本を読むことは別の人生を生きることだからです。本を読めば、一人の人が長い時間とエネルギーをかけて得たものを短い時間で自分のものにできます。すると、それに刺激を受けて、自分も挑戦しようと思うようになります。また、やり抜くにはしなやかさが必要です。複数の考え方ができる人は強く、一つの考え方しかできない人はも

ろいと言われています。別の言い方をすれば、本を読むことは、複数の人間を自分の中に住まわせること。自分と違う意見、わからないこと、納得できないことも捨てずに自分の中にためておくことが、心を強くしなやかにします。

「論理的思考さえ読書で育つ」と数学者藤原正彦が言っています。論理的思考、つまり筋道を立てて考える力は、数学ではなくて、読書で育つというのです。さらに、「論理的思考力は、人間としての総合力。人間についての洞察力も必要。文学、歴史、思想、芸術など、一見役には立たない分野が教養には重要である。」と述べています。



物語は、虚構という方法を使って、人間や世の中を描くものです。虚構を使うのは、それが一番効果的だからです。即効性はありませんが、後からじわじわ効きます。物語を読むことは情報収集ではなく体験です。藤原は、「先人の知恵に学び、個人では経験できない感動に涙を流す。これなくして教養は育たず、物事の全体を見る力が得られない。」とまで言っています。

それを象徴的に表しているのが、オウム真理教事件です。この事件を起こした人たちの中には、有名大学を出た人が多くいました。でも、高学歴の彼らは、ほとんど文学を読む習慣がなかったそうです。教祖の考えが本当に正しいのかを全体から判断する基準を持たなかったと考えられます。

結局、何のために学ぶのか？つけた力を何のために使うのか？ということが大切なのです。どんなに勉強してもそれを人を傷つけることに使ったら何にもなりません。

物語を読むことは、自分の中の真・善・美を育てることにつながります。それは、洗心の精神ともつながっていると思います。

全ての人に本を読んでほしいという願いから、ほとんどの県・市町村、全ての学校に図書館があります。人類の英知がつまった本を読まない手はありません。本は心の栄養。読まなきゃ絶対損です。＊ ＊

村山市は、読書教育に力を入れています。もうすぐ秋。本を読むのに最適な季節です。

